

# 第 1 部 通 史

## 第1章 新たな総合大学への歩み

この章では、1949年から1979年までの30年間における千葉大学の発展を扱う。この時期に関しては『千葉大学三十年史』に詳細な記述があるので、1949年創設後、学部の整備とキャンパス統合により総合大学としての体制を整え、教育研究の高度化をはかっていく過程は、同書に依拠して略述する。第2章で扱われる大学院の拡充と人文・社会系学部の充実との関連を重視して、その前提となる1970年代における大学院の充実と関係学部の発展については、とくに節を設けて詳述した。

### 第1節 大学創設からキャンパス統合へ

千葉大学は、1949年5月31日、いわゆる新制の国立大学69校の1つとして発足した。新制大学とは、戦後の抜本的な改革の結果生まれた6・3制の学校教育のなかでの高等教育機関として、新たな大学設置基準にそって設立された4年制大学（医学部は6年制）のことである。

その発足にいたるまでの過程では、いくつかの構想が議論され若干の紆余曲折があったが、結局、連合軍最高司令部の提示した1県1国立大学の原則がそのまま文部省の基本方針として決定され、この方針にそって千葉県でも、県内に当時存在した官立の高等教育諸機関の統合により千葉大学が生まれた。すなわち千葉医科大学、同大学附属薬学専門学校、戦災のために松戸に移転していた東京工業専門学校、千葉農業専門学校、千葉師範学校、千葉青年師範学校が、医学部、薬学部、工学部、園芸学部、学芸学部の5学部からなる千葉大学を構成することとなったのである。学芸学部は、義務教育担当の教員を養成すると同時に、各学部の一般教育にあたるものとされた。

発足はしたものの、大学には緊急の課題が山積していた。とりわけ、大半の学部で、戦災あるいは老朽化のために、教育研究のための設備は劣悪をきわめていた。政府の文教予算の枠内では、旧軍用施設を転用しても教育環境の整備は望むべくもなかった。窮余の一策が1949年12月から翌年1月にかけての「千葉大学振興宝くじ」の発

## 第1節 大学創設からキャンパス統合へ

行であった。大学関係者、とくに学芸学部の教員・学生は、1,000万円の売り上げを目標に、木枯らしの街頭でみずからくじを売り歩いたという。

また、教員養成にあたる教育部と学問の基礎的研究分野を担当する学芸部とを包括する学芸学部は、当初から学部としての一体性に根本的な問題をはらんでいた。こうして同学部は設立1年にして、教育学部と文理学部とに分離改組されることになる。全国的にみると、旧制高等学校を基礎にもたない新制大学で文理学部が認められた例は他にない。本学の場合、県内にあった東京医科歯科大学予科が学制の変更とともにその存在理由を失い、千葉大学文理学部の設立に参加したことが有利に作用したものと見える。文理学部は、全学の一般教養をになうと同時に、文科・理科両系列の専門教育、教育学部の教科専門教育をも担当した。

つぎの課題は工芸学部の改組であった。東京工業専門学校は、もと東京高等工芸学校として日本の伝統工芸の技術的・理論的追求を目的に設立されたものであり、この伝統の継承を指向して工芸学部が設立された。しかし総合大学の専門学部としては、工学部がよりふさわしいとの判断から、学部内の根強い反対を押し切って、第1期生が専門課程に進学する1951年には工学部に改組された。さらに翌1952年には、千葉大学工業短期大学部（夜間・修業年限3年）が設置され、ここでとくに東京工業専門学校時代以来の伝統が継承されると同時に、やがて戦後日本の技術革新の一翼をものになうこととなった。

大学設立と同時に設置された医学部は当初は旧制度の学部であり、新制医学部の発足は、一般教養課程をおえた学生が入学する1951年を待たなければならなかった。しかし医学部への入学には2年間の一般教養課程修了後さらに入学試験をうけなければならない当時の制度のもとでは、この学生の教育が全学の教育全般におよぼす影響と矛盾は否定しがたく、その改善が望まれるようになり、1954年に6年一貫の教育体制への改編が実現する。さらに1955年には、大学院医学研究科博士課程が設置され、医学教育はようやく整備されることとなった。

こうして、総合大学としての千葉大学の部局体制はいちおう整ったものの、ここで示された理念的な構図はなお「可能態」にとどまり、それが「現実態」（『千葉大学三十年史』5ページ）となるには、さらに数年の歳月とその間における大学教職員のなみなみならぬ努力の積み重ねが必要であった。

初期の千葉大学で、最大の問題の1つとして意識されていたのは、各学部が千葉市内数力所と松戸市、さらに印旛郡千代田町（現四街道市）に分散していた点であった。しかも施設の多くは老朽化し、あるいは粗末なバラック建てであった。この問題

## 第1章 新たな総合大学への歩み

を解決するため、1950年大学評議会は、千葉市弥生町の東京大学第2工学部の敷地と建物を千葉大学に所管替えし、医学部と薬学部とを除くすべての学部をここに統合する整備計画を決定した。千葉県議会は、「東京大学生産技術研究所の必要なる部分を除き、他を悉く千葉大学に割譲を受け、ここに散在せる学部並びに分校を移転することは本県の切なる要望である」と、この計画を全面的に支持した。だが計画が実現をみるまでにはなお紆余曲折があり、1961年5月にいたってはじめて、大蔵省関東財務局国有財産審議会は生産技術研究所敷地495,000平方メートルのうち、391,150平方メートルを千葉大学へ移管することを決定した。ここでようやく大学は、西千葉地区への移転とこれによる施設整備計画を具体化することができた。

実際の移転は、1962年、教育学部と留学生課程の移転を皮切りに、ついで事務局、学生部、および附属図書館、翌年に文理学部、さらにその翌年1964年には工学部が移転して、10年来の懸案であった西千葉地区への大学の統合がようやく完了することとなったのである。なお留学生課程は、東南アジア、近東諸国からの国費留学生に対し日本語と一般教養、専門基礎教育を行うための3年課程であり、東京外語大学とともに、千葉大学に1960年に設置された。本学では理系のための教育を担当した。この課程は、1964年、外国人留学生のための一般教養部として留学生部と改称されたが、教養部の設置にともない、1972年3月に廃止された。

他方、医学部、薬学部、腐敗研究所については、1956年以降、「矢作・亥鼻地区委員会」において、この地区の薬学部と腐敗研究所を統合する計画を検討していた。しかし1964年にいたり医学部附属病院の新営が具体化するにおよんで、薬学部は矢作地区での新営を断念し、西千葉地区への統合を希望することとなる。この計画が評議会で承認され、以後、医学部、同附属病院および附属学校（看護学校、診療エックス線技師学校、助産婦学校）さらに研究施設（肺癌研究施設、農山村医学研究施設、脳機能研究施設）の亥鼻地区での整備・拡充が着々と進んだ。腐敗研究所については、その立地、新営をめぐるなお紆余曲折を重ね、同研究所が生物活性研究所として改組されたのちの1974年にいたって、ようやく亥鼻地区での新営が正式に決定された。